

リベラルアーツの比較研究

中 井 章 子

本研究プロジェクトは、青山学院女子短期大学において2012年度に発足した「現代教養学科」を覚え、現代日本における「教養教育」＝「リベラルアーツ教育」を多方面から考察し、子ども学科を含めた本学全体の「教養教育」に具体的に資することを目的としている。

本研究プロジェクトでは、「教養」や「リベラルアーツ」を既知の事柄としてとらえるのではなく、これらの用語や事柄を改めて問い直したいと考えている。そのため、第1には現代世界と日本の「教養＝リベラルアーツ教育」を調査・研究し、検討・考察している。第2には、世界と日本における「教養＝リベラルアーツ教育」を歴史的に研究している。「比較研究」とは、本学と他大学、日本と世界、過去と現代の比較をたえず視野に入れているということである。

年報の前号においてすでに報告したように、初年度（2012年度）には、次の3回の講演会を開催した。1. 木部尚志氏（政治学、国際基督教大学）「リベラルアーツと大学教育—ICU からみた現状と課題」、2. 藤本夕衣氏（教育学、東京大学総合教育研究センター（現・日本学術振興会特別研究員 RPD（慶應義塾大学））「多文化状況の大学における古典—アメリカのリベラル・エデュケーション論を手掛かりにして—」、3. 三田村雅子氏（日本文学、上智大学）「『源氏物語』と＜古典知＞」である。

2013年度には、講演会を4回開催し、リベラルアーツについての知見をさらに深めた。1. 松浦良充氏（教育学、慶應義塾大学）による「『リベラル・アーツ』と『教養教育』のあいだ」（2013年12月17日）では、日本におけるリベラル・アーツの理解、リベラル・エデュケーションの「弁論家」と「哲学者」という二つの系譜、アメリカにおけるリベラル・アーツについて幅広く、示唆に富む話を聴くことができた。「非実用性」をどう考えるのか、そもそも「教養」は教育できるのか、「自由」や「主体性」と「教育」との間の緊張関係など、考えるべき問題点についても語られた。2. 鬼頭秀一氏（社会文化環境学、東京大学大学院（現・星槎大学））による「福島『被害』、今後の『復興』に対しての『学』の役割を問う」においては、「福島」の具体的な例を取り上げて、「学」の役割や、「知」のあり方、専門家と市民のコミュニケーション、政策の枠組みなどの問題点が語られた。「リベラルアーツ」の役割や必要性和深く関わる問題である。3. 前田更子氏（フランス教育史、明治大学）「19世紀フランスの女性と『教養教育』——私立寄宿学校の風景」では、19世紀フランスの高等教育と女子教育、公立と私立の学校の相違、宗教の問題、教養教育と専門・職業教育の関連などが、史料にもとづいて語られ、新たな観点が与えられた。4. 大森秀子氏（教育史、

青山学院大学)「アメリカの教養教育とジェンダー ～日本の女子高等教育成立への道～」においては、アメリカ女性のリベラル・エデュケーションの変遷が具体的なカリキュラムに即して語られ、日本における女子高等教育の構想が紹介された。宗教教育や家政学の問題も含め、本学にもつながる問題が歴史のなかで論じられた。

講演は以上のように、それぞれ一冊の本に値する内容であるが、講演者に直接質問できるこのような機会は貴重であった。

研究員はそれぞれのテーマで研究をすすめている。

梅垣千尋は、「18世紀イギリスのリベラル・アーツと女性」というテーマのもと、啓蒙の時代の知の広がりの中で、新たに学問世界に触れるようになった女性が、従来の専門的学知をどのようにとらえ返したのかを研究している。この問題を深めて考察するために、エリザベス・ハミルトンという女性思想家に焦点を当てている。

中井章子は、「ドイツ語圏近代のリベラルアーツ」をテーマとし、1800年前後のドイツの大学論を研究している。ドイツの高等教育史では、ベルリン大学創設(1810年)が重要な画期として語られるが、それ以後でなく、それ以前の大学論に注目している。

鈴木俊之は、現代イギリスおよびヨーロッパの高等教育をテーマとしている。イギリスでは、幅広く学習する前期中等教育段階、2～3科目に絞って学習する後期中等教育段階を経て、大学では一つの科目を学習する、言い換えれば専門教育を行うことになっていた。しかしながら最近有力校がリベラル・アーツ・プログラムを開始させるなど、大学教育の様相が変化しつつある。また大陸ヨーロッパにおいてもこうした動きが1990年代後半以降に見られるため、それらの動きの背景とイギリスの事例について調査した。

八耳俊文は、青山学院女子短期大学において科学史・科学社会学の内容を持つ授業科目を「学生便覧」より抽出し、その科目と担当者を一覧し、本学でなぜ科学史関連の授業が充実していたのかを論じた。大学におけるリベラルアーツ教育の中で、科学の中身を伝えるのみならず、科学の歴史的・社会的性格を理解させ、科学に対応する力を身につけさせることが市民教育として求められている。本学の例は貴重な記録といえる。

「リベラルアーツ」はとても大きなテーマであり、一人で論じ尽くすことは不可能であり、共同研究にふさわしい課題であると言える。講演者も含め、他の研究員の研究を参考にそれぞれが「リベラルアーツ」理解を深めていくことができればそれが成果なのであろう。